◆資源・環境対策事業

海洋保護区を主とする沿岸資源管理（その２）
－ヨナラ水道におけるナミハタの禁漁区－

八重山農林水産振興センター　鹿熊信一郎

１．目的

ナミハタ（方言名サッコーミーバイ）は、非常に短い間の産卵期に特定の産卵場に集まり、集中的に産卵することが知られている。このとき漁獲も集中し、価格が暴落することになる。このため、沖縄県水産海洋研究センターと西海区水産研究所が調査を行い、産卵期に産卵場を禁漁区とし、産卵群を守ることを八重山漁協に提案していた。

平成 22 年 3 月の八重山漁協・資源管理推進委員会で、ナミハタの資源管理が検討され、その後、電灯潜り部会での話し合いや理事会での協議を経て、試験的にナミハタの禁漁区を設定することになった。

２．方法、結果、考察及び課題

水温によっては一月ずれることもあるが、平成 22 年は 5 月 6 日を中心にして集中的に産卵することが予想された。そこで、5 月 4 日～ 8 日の 5 日間、西表島と小浜島の間にあるヨナラ水道の約 325 ヘクタール（図 1）を全魚種禁漁とすることに決定した。

禁漁期間中、電灯潜り部会などが船を出して監視にあたった。その結果、初日に遊漁船 1 隻が禁漁区内に入っていたことを除き、操業を行った船はなかった。八重山地域では、漁船に匹敵する数の遊漁船があるので、その対策は重要である。今回の資源管理は漁業者の自主規制なので、遊漁者には協力を求める形になる。このため、地元新聞に禁漁区の記事を載せてもらい、広報・普及に努めた。

図 1 ヨナラ水道の禁漁区

今回の資源管理の取組は成功したと評価できる。その理由は：

1) ナミハタが予想どおり大きな産卵群を作った（1 週間前はほとんどいなかった雌が、きわめて高い密度で集まっていた）。
2) 5 月 5 日と 6 日の調査では、雌の腹は卵でパンパンに膨らんでいた（図 2）。8 日の調査では、高密度にいた場所でもナミハタはほとんど見られず、6 日の夜を中心に集中的に産卵して、この海域を離れたと考えられる。
3) 平成 21 年の集中産卵期には、市場への供給過剰で価格が暴落し、漁協が 500 円／ kg で買い支えることもできなかったが、今年はそれほど価格が下がらなかった（700 円／ kg）。

真の成果は、今回大量に産卵された卵が孵化し、成長して 4 ～ 5 年後に漁獲される、あるいは産卵することだが、これは流れや水温、餌生物などの環境に左右される。したがって、資源管理は継続する必要がある。

図 2 卵で腹が膨らんだナミハタの群れ